

## 比較文化Ⅱ [第14回]

丸山純 (jun@site-shara.net) / <http://www.site-shara.net/daito/>

### ●タテ社会の人間関係

#### 中根千枝

1926年東京生まれ。東京大学文学部東洋史学科卒業。のち、ロンドン大学で社会人類学を専攻。現在東京大学名誉教授。研究対象は、インド・チベット・日本の社会組織。著書：『適応の条件』『タテ社会の力学』（以上、講談社現代新書）、『家族を中心とした人間関係』（講談社学術文庫）など。

#### ▼『タテ社会の人間関係——単一社会の理論』

まえがき

##### 1. 序論

日本の社会を新しく解明する／「社会構造（ソーシャル・ストラクチャ）」の探求

##### 2. 「場」による集団の特性

集団分析のカギ——「資格」と「場」／「場」を強調する日本の社会／成員の全面的参加／家族ぐるみの雇用関係／「ウチの者」「ヨソ者」意識

##### 3. 「タテ」組織による序列の発達

構造分析のカギ——「タテ」「ヨコ」関係／序列偏重の背後関係／中国・インド・チベットとの比較／イギリス・アメリカとの比較

##### 4. 「タテ」組織による全体像の構成

対立ではなく並立の関係／人間平等主義／過当競争による弊害／ワンセット構成と政治組織の発達

##### 5. 集団の構造的な特色

集団の内部構造／日本の集団の弱点と長所／必然的な派閥関係

##### 6. リーダーと集団の関係

制約されるリーダーシップ／権威主義と平等主義の力関係／リーダーの資格

##### 7. 人と人との関係

契約精神の欠如／相対的価値観の支配／論理よりも感情が優先

おわりに

#### ▼従来の二つの立場……どちらも西欧というモデルを前提として出発

日本社会、あるいは文化を論ずる場合の二つの立場

1. ……ヨーロッパを主な対象とした研究から得られた理論・方法を用いて日本の諸現象を整理・説明する方法

西欧のモノサシで、日本を見ようとしている

2. ……日本にしか見られないと思われる諸現象を特色的に取りだし論ずることにより日本社会、文化を説明する方法

西欧にない社会現象を一括して、日本の後進性とか、封建制が残っているなどと説明

どちらも『西欧』というモデルを前提として出発している……同じ線上の両極に立つもの

#### ▼日本のためのモノサシ……「社会構造」(social structure)

ここでは、日本社会の構造を最も的確にはかりうるモノサシを提出する

和服の作り方（サイズ）を説明するのに、鯨尺ならびったり表わせるのに、メートル法のモノサシだとおかしい端数が出る

後身幅＝七寸五分、前身幅＝六寸、衽幅（おくみ）＝四寸

社会人類学という「社会構造」(social structure) の探求

社会学・経済学・歴史学などで使用する「社会構造」とは少し意味が異なる

もっと抽象化された概念……一定の社会に内在する基本原理

例：村落と都市……あらゆる組織・様式が異なるにもかかわらず、社会集団としての「ストラクチャ」は同一であると指摘できる

### ●キー概念：「資格」と「場」

#### ▼二つの異なる原理を設定……「資格」と「場」

社会集団の構成の要因に二つの異なる原理が設定できる

資格…出身階層、学歴、地位、職業など個人の属性

場……個人が属する地域、所属機関、職業集団など

どちらの要因によって社会構造が構成されているかによって、その社会の特質が生まれる

## ▼資格とは

生まれながらに個人にそなわっている属性……氏・素性

生後個人が獲得したもの……学歴・地位・職業

経済的にみると……資本家・労働者・地主・小作人

社会的相違……男・女、老人・若者

特定の職業集団、一定の血縁集団、一つのカースト集団など

## ▼「場」とは

資格の相違を問わず、一定の枠によって集団が構成されている

一定の地域とか、所属機関

## ▼「資格」と「場」の例

教授・事務員・学生……資格

大東文化大学の者……場

たいてい両者は交錯しておのおの二つの異なる集団を構成している

日本人の集団意識は非常に場に置かれており、インドでは正反対に資格に置かれている（カースト）

日本人は、自分を社会的に位置づける場合、資格よりも場を優先することを好む

「新聞記者です」「エンジニアです」＜「朝日新聞の者です」「ソニーの者です」

会社とか大学とかといった「枠＝場」が大きな役割を持つ

個人のもつ資格は第二

## ▼会社は誰のものか？

西欧では、会社は個人が一定の契約関係を結んでいる企業体……「会社は株主のもの」

日本では、「われわれの会社」として主題的に認識

自己の社会的存在のすべて、全生命のよりどころとなっている

経営者と従業員は「縁あって結ばれた仲」

夫婦関係にも匹敵できる人と人との結びつき

従業員は家族の一員

仕事ではなく人のかかえるので、当然その付属物である従業員の家族も受け入れる

従業員は、嫁

## ●なぜタテ社会ができたのか？

### ▼「タテ社会」の根源にあるのは「家」（場としての家）

戦前の「家制度」は新憲法でなくなったはずなのに色濃く残る

家父長制・長子相続制

「家」は生活共同体であり、経営体であり、明確な社会の単位

「家」集団内における人間関係が、他のあらゆる人間関係に優先

日本では、他家に嫁いだ娘・姉妹より、よそから入ってきた妻・嫁が重要

家を出た兄弟より、家の者となった養子のほうが重要

インドと日本では嫁と兄弟姉妹のあり方が対照的

インドでは、兄弟姉妹関係は死ぬまで強く続く

嫁は長期間の里帰りが可能で、兄弟が嫁ぎ先にもよく訪問してくれ、援助を受けられる

嫁・姑の喧嘩をすると、近隣の女たちがやってきて、それぞれの資格（立場）から応援してくれる

日本では、嫁は姑との関係を表に出せず、一人で解決しなければならない

実家に泣きつくことも、社会的には奨励されない

兄弟姉妹関係の機能が強ければ強いほど、「家」の社会的独立性は弱くなる

### ▼ウチの者vsヨソ者

日本人は仲間と一緒にグループでいるとき、他の人々に対して実に冷たい態度をとる

相手が自分たちより劣勢であると思われる場合には、特にそれが優越感に似たものとなり

「ヨソ者」に対する非礼が大っぴらになるのがつねである

アメリカ留学中、中国人研究者同士で会話していても、そこに外国人（日本人）が通りかかると、さっと英語に切り替えるのを何度も体験

日本人は、仲間内でしか通じない発想や用語を使用するため、他のグループと意思が疎通せず、ディスカッションが不可能

外国に行っても、現地の外国人たちと密接な社会関係（友人関係）をもちつづけるということは、日本人にとってはたいへんむずかしい

現地の人々と親しく交わる日本人は、日本人コミュニティから遠ざかったり、脱落したりしている

二つ以上の集団に属していることは、中国人にとっては普通のこと

日本人の場合は「あいつ、あっちにも通じていやがるんだ」と、道徳的な非難を浴びる

## ▼「タテ」組織の象徴……「親分・子分」関係

タテの関係……親子関係

ヨコの関係……兄弟姉妹関係

ヨコの関係は、理論的にカースト、階級的なものに発展し、タテの関係は親分・子分関係、官僚組織によって象徴される

日本人の場合、同じ資格、あるいは身分を有する者の間にあっても、つねに序列による差が意識され、また実際にそれが存在する

先輩・後輩の序列は社会集団内において驚くほどの機能をもっている

## ▼日本社会特有の「能力平等観」

これまでの日本の会社は、「終身雇用制」を前提とした「年功序列制」で運営されてきた

入社年度が後の者が、先の世代の出世頭を追い越して出世することはない

その根底にあるのが、根強い「能力平等観」

人間は平等で、同じ能力を持っている

だから、経験を積みば（入社が長くなればなるほど）仕事ができるようになる

日本人の人間平等主義は無差別悪平等

平等主義から派生するところのぬるま湯的道德が見られる

能力がある者にもない者にも、自信を持たせ、努力を惜しまずに続けさせるところに大きな長所がある

タテのリンクは、そうした努力してきた個人にとって、またとない上昇するためのはしごを提供する

## ▼インドでは、下層で生きていても、日本のようにみじめではない

インドでは、貧しい下層カーストの人々が、少しも日本の下層の人々のように心理的にみじめではない

そのカーストに生まれれば、死ぬまでそのカーストにとどまる

競争に敗れたという悲しさがない——という安定した気持ち

同類がいて、お互いに助け合うという連帯感をもちうるため

日本では、同類が敵となる

それがいつそうタテの機能を強くさせ、ヨコの機能が弱くなる

## ●日本の組織と日本的リーダー

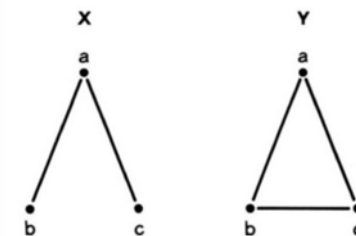
### ▼タテ社会とヨコ社会の構造

タテ社会（X）は、下が開いた三角形で表現できる

ヨコ社会（Y）は、閉じた構造をしている

Xは開放的だが、Yは排他的

タテ社会では、bの了解があればdは組織に入れるが、ヨコ社会では全員の許可が必要



### ▼位置の交替可能なY、交替できないX

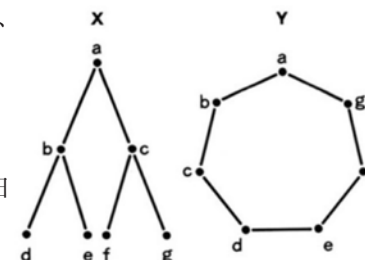
いったん参加が認められると、ヨコ社会では新参者も旧メンバーと同列に立てる

メンバー個人の位置（ポジション）は交替可能

Xでは、特定のメンバーとの関係（序列）がそのまま組織として定着してしまう

メンバー個人の位置は交替できない

新参者は、常に損な役割に立つことになる



### ▼Xは「情感」、Yは「ルール」でつながる

タテ社会は、エモーショナルな情感をベースにした個人的な人間関係でつながっている

全人格的に組織に支配される

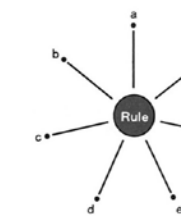
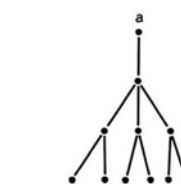
情報や命令の伝達が迅速（上意下達）で、動員力に富んでいる

日本人がめざましい近代化をやりとげることができた一因

ヨコ社会は、ルール（契約）に支配される

ルールに縛られる部分以外は、組織から自由

すべてにおいて議論が発生し、なかなか事案が進まない



## ▼Xの「親分」の権限は、じつは小さい

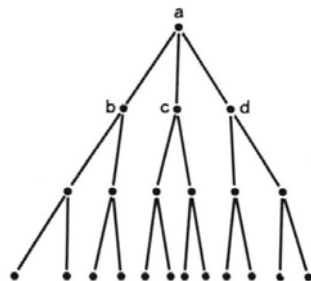
リーダーはすべての成員を、直接ではなく、大部分はリーダーに直属する幹部をとおして、把握している

リーダーに直属する幹部成員の発言権をきわめて強いものになっている

ともすればリーダーは二人以上のこれら直属幹部成員の調整役的立場に立たされる

→リーダーの権限が非常に小さい

温情主義という言葉に表わされている情的な子分への思いやりは、つねに子分への理解を前提とするから、子分の説、希望を入れる度合いが大きい



## ▼日本の組織のリーダーは、バカでもつとまる

日本特有の「稟議制」

上の者の発想を下の者におしつけるのではなく、反対に下の者が上司に意見を具申して採ってもらう

これを十分に活用すれば、極端にいうと、上に立つ者はバカでもいいということになる

上に立つ者、親分は、むしろ天才でないほうがよい。彼自身頭が切れすぎたり、器用で仕事ができすぎるということは、下の者、子分にとって彼らの存在理由を減少することになり、かえってうとまれる結果となる

他の国であったならば、その道の専門家としては一顧だにされないような、能力のない（あるいは能力の衰えた）年長者が、その道の権威と称され、肩書をもって脚光を浴びている姿は日本社会ならではの光景である（年功序列制のバックボーン）

一見硬直しているようで、じつは自由な活動の場を与える組織

日本の組織というものは、序列を守り、人間関係をうまく保っていれば、能力に応じてどんなにでも羽をのばせるし、なまけようと思えば、どんなにでもなまけることができ、タレントも能なしも同じように養っていける性質をもっている

序列偏重で一見非常に弾力性がなく、硬直した組織のようであるが、これは同時に、驚くほどの自由な活動の場を個人に与えている組織である

## ▼リーダーの人間的な魅力で、部下は動く

集団の機能力は、ともすれば親分自身の能力によるものよりも、むしろすぐれた能力をもつ子分を人格的にひきつけ、いかにうまく集団を統合し、その全能力を発揮させるかというところにある

子分が動くのは、親分の命令自体ではなく、この人間的な、直接膚に感じられるところの人間的な魅力なのである

「俺の顔にめんじて……」というせりふは、あらゆる理性的な判断をこえた力をもつのである。「天皇陛下万歳」といって死んでいったとされる兵たちは、実は日ごろ温情をかけられ、敬愛するところの「この小隊長のいうことだから」といって勇戦したといわれる

## ●「タテ」組織に代わるもの——契約

### ▼インドや東南アジアでは、兄弟関係が強い

子分の代わりに、兄弟とか、同類のものをもってくる

いわゆる「縁者びいき（ネポティズム）」やカーストや階級形成に通ずるものであり、特権がある集団に独占される危険性を十分もっており、親分・子分関係より、決してすぐれているといえない

### ▼もう一つの方法は「契約（コントラクト）」関係によること

ヨーロッパの学術調査団

そのほとんどが何々大学調査隊などといわず、団長の名を調査団の名前とする

団員は広く一般から最も調査団の目的にあっていると思う専門家を抜擢、招請

隊長が以前少しも面識がなかった者などはいっていることが多い

一度、団長と団員の間にコントラクトが結ばれると、その調査が終わるまで、団長と団員の関係は徹底したものになる

日本の学術調査団

コントラクト形式などをとって寄り合い世帯的団員構成をもった場合、ほとんど例外なく失敗を招く

リーダーが長老格の教授で、その愛弟子ばかりを団員とした調査団ほどうまくいっている

### ▼タテ社会では、複数の師をもつことはできない

日本の武士道

できれば一人の特定の主君に仕えることが理想……二君にまみえず

西欧中世の騎士道

主君を変更することができたばかりでなく、同時に一人で、二人とか三人の主君に仕えることも可能で、道徳的に非難されることもない



西欧をはじめアジア諸国においてさえ、複数の師をもつのは普通であり、何ら不便を感じないものであるが、日本人の場合、たいてい特定の一人を師としてもっているのが普通である。そして、師のほうも、自分の弟子が他の師をもつことに非常に抵抗を感じるのが普通ではなかろうか。

この日本人の習性が最も大きくあらわれるのは、学会や研究会である。若い学者が先輩の学者に対して堂々と反論できないことである。

こうした場合の、学会での反論の仕方をみると、まず、不必要な賛辞（それも最大限の敬語を羅列した）に長い時間を費やし、そのあとで、ほんのちよっぴり、自分の反論を、いかにもとるにたらないような印象を与える表現によって付け加えたりする。客観的にみると、学者にあっても真理の追求より、人間関係のリチュアルのほうが優先している、といわざるをえない。

コントラクト精神とは異質な、恒久的に設定される単一の「タテ」の人間関係というものが、日本社会に根強く潜在している

## ▼日本人は、論理的なやりとりができない

論理で説得されるのではなく、社会的強制で譲歩

論争が行なわれ、どちらかが、ゆずらなければ事が運ばないような場合、一方の主張がとおり、一方が譲歩する原因は、論争のテーマ自体でなく、他の社会的強制による場合が圧倒的に多い

譲歩した側には、いつも感情的欲求不満が残りやすく、また、これは第三者にとっては、不可解な決着が少なくない。論理による勝敗の決着にみられる、あのサバサバした気持ちには遠く及ばない。日本人の「話せる」とか「話ができる」という場合は、気が合っているか、一方が自分がある程度犠牲にして、相手に共鳴、あるいは同情をもつことが前提となる

論理を敬遠して感情を楽しむ

日本人は、論理よりも感情を楽しみ、論理よりも感情をことのほか愛するのである。少なくとも、社会生活において、日本人はインテリを含めて、西欧やインドの人々がするような、日常生活において、論理のゲームを無限に楽しむという習慣をもっていない

ノーベル賞を受賞された朝永博士がいつかこんなことを書いていらした。——外国の物理学者は、食事をしている時でも、酒を飲んでいる時でも、すぐ物理のディスカッションを始め、紙と鉛筆を出して式を書き、まるで何か憑かれた人という感じで、こちらはとてもついて行けない、と。私も外国生活になれない頃は彼らが食事中にも団樂のサロンでもたいへん頭脳を使う話をするので、閉口した

日本人、日本の社会、日本の文化というものが、外国人に理解できにくい性質をもち、国際性がないのは、実は、こうしたところ——論理より感情が優先し、それが重要な社会的機能をもっているということ——にその原因があるのではなかろうかと思われる

## ●単一性社会だから許されること

### ▼日本の社会を支えている大きな特色……単一性

これほど強い単一性をもっている例は、世界的に見てもない

日本列島は圧倒的多数の同一民族によって占められ、基本的な文化を共有してきたことが明白

日本における地域差といわれるものは、同質社会のなかの相対的差の問題にしかすぎず、むしろ共通性のほうが重要なウェイトをもっていることがわかる

江戸時代以降の中央集権的政治権力にもとづく行政網の発達によって、いやが上にも助長され、強い社会的単一性が形成されてきた

さらに近代における徹底した学校教育の普及が人口の単一化にいつそう貢献し、とくに戦時の挙国一致体制、そして、戦後の民主主義、経済の発展は、中間層の増大拡大という形をとりながら、ますます日本社会の単一化を推進させてきたものといえよう

### ▼単一性こそ、関係設定のあり方を決定する基盤となっている

本書は「日本人の特質」ではなく、「単一社会の理論」と呼ぶべきもの

この日本社会の「単一性」こそ、本書で展開した、人と人、人と集団、集団と集団、の関係設定のあり方を決定する場合に、重要な基盤となっているものである。

「場」による集団の形成、平等主義、同類との競争、感情の優先する世界の形成など、すべてこの「単一性」を前提とすると、いつそう首肯しうるものである

2014.11.24 10:30 産経新聞ニュース

【自作再訪】

## 「タテ社会の人間関係」 ソトから見た日本の構造とは 中根千枝さん

### もう少し柔軟なシステムになるのが望ましいのでしょうね

日本の社会構造のあり方を分析した中根千枝さん（87）の名著『タテ社会の人間関係』（講談社現代新書）は、今なお読み継がれる超ロングセラーだ。昭和42年の刊行からほぼ半世紀がたつのに、論じられた内容は現代日本社会にも当てはまる。日本は変わらなかったのか、あるいは変わる必要がなかったのか？ 東大名誉教授で社会人類学者の草分けとして知られる中根さんに聞いた。（聞き手 伊藤洋一）



人類学の研究は本を読むばかりでなく、現地に長期滞在することが必須の条件です。昭和28年からインドに3年、さらに34年から37年にイギリス、イタリアで研究しました。米シカゴ大や英ロンドン大でも研究を積みました。

日本に戻ったとき、月刊誌『中央公論』から「どんなテーマでもいいから論文を書いて」と注文がきました。そのとき思いついたのが、日本の集団構造はどこでも同じ——ということだったの。

インドに行く前、東北から鹿児島まで農村の調査をしています。民族学の研究者は「関東と関西の文化は違う」と差異を強調するのね。もちろん、風習や食べ物、お祭りなどは違うけど人間関係、集団内の意思決定プロセスは同じだと気づきました。

一方のインドはカースト制で、英国は階級制。同じ階層でつながる機能をもつヨコの関係に対して、日本の社会は常にタテになっている、と。論文では分析する用語として「資格（属性）」と「場」を設定しました。どの社会にも資格と場はあり、インドや英国では資格が重要なのに対し、日本ではどんな職業かという「資格」より、〇〇会社の構成員という「場」が重視される。こうした内容を、ホテルにこもって2週間くらいで書き上げたものが「日本の社会構造の発見」（昭和39年5月号の中央公論掲載）です。

日本をウチ側から分析する従来の手法とは違うから、読まれないと思っていました。そうしたら、京都大の猪木正道教授（1914～2012年）がほめてくださったこともあって評判になり、いくつかの出版社から本にしないか、と持ちかけられました。

《論文を加筆・修正した『タテ社会の人間関係』は昭和42年に刊行。現在までに124刷116万部超のロングセラーとなり、英国で出版された英語版は、13カ国で翻訳出版されている》

旧知のシカゴ大の教授には「女性だから書けた。日本の男性はタテのシステムにどっぷり漬かっているから書けない」と言われました。私は小学校高学年から6年ほど、父が弁護士をしていた北京で暮らしました。中国人だけでなく他国の人も周囲にいて、それが普通のことだったのが大き

いわね。

日本では地域性による違い、発展段階説的な考え方の傾向があるのに対して、私の立場は日本をソトから見て、その比較に視点を置いて理論化したことがユニークだ、と評価されたのではないのでしょうか。

《女性で初の東京大学助教授、教授、国立大学初の女性研究所長（東大東洋文化研究所）、そして女性初の日本学士院会員と第一線で活躍。女性の社会進出の象徴のような存在としても知られる》

女性が上の地位に就こうと思えば、タテのシステムに入らないと難しい。たとえば官僚でも、上（の地位）に就いている人は、少なくともその組織内での順番は守っているのよ。抜擢（ばってき）されるといっても、せいぜい（年次が）3年くらい（の違い）じゃないかしら。女性が多い看護師の職場でも（年功序列の）順番はあるでしょ。民間でも、タテになっていない女性が（大抜擢されて）上にきたら、男性は機嫌が悪くなり、働かなくなりますよ。

外国では、性別にかかわらず能力があれば若くても抜擢され、他の人も認めるけど、タテが優先される日本では、無理ですね。国会議員でも当選回数が重要でしょ。個人それぞれの資格より、集団に参加した時期（新旧）が問題になる。インドの官僚に、どれくらい年次が離れていれば気にするかを聞くと、7年くらいだと。英国ではそもそも、先輩後輩という呼び方がない。日本では1年違えば大違いなのにね。こういう社会構造というのは、時代が変わっても、変わらないものです。

上昇期や安定期には、タテの組織はよく機能しています。ただ、何か危機が起きたときに優秀なトップがいないとはかぎらない。それは悲劇。

明治維新や終戦直後のような混乱期には、若くて立派なリーダーが出てきた。能力があると周囲が認めて、実際に行動力がある人がリーダーになれば、その集団はとてもうまくいく。タテの関係を認めつつ、もう少し柔軟なシステムになるのが望ましいのでしょうね。



### 【プロフィール】中根千枝

なかね・ちえ 大正15年、東京都生まれ。東京大学文学部東洋史学科卒、同大学院修了。東大東洋文化研究所助教授などをへて昭和45年に東大教授。平成2年に紫綬褒章、5年に文化功労者、13年に文化勲章を受章。インドの奥地アッサムを探検、調査したものをまとめた『未開の顔・文明の顔』で毎日出版文化賞受賞。ほかの著書に『適応の条件：日本的連続の思考』など。

## ●「イスラーム国」(IS) への道

### ▼イスラーム世界を取り巻く現代史 (2015.12.9)

東西冷戦の開始 (1945)  
 エジプトにおける過激主義の系譜  
 イラン革命 (1979)  
 ソ連のアフガン侵攻 (1979)  
 ソ連軍撤退後の内戦とタリバンの伸張 (1995～)  
 イラン・イラク戦争 (1980～88)  
 湾岸戦争 (1990～91)  
 アル・カーイダの伸張 (1988～)  
 9.11 同時多発テロとアフガン戦争 (2001～)  
 イラク戦争 (2002～)  
 アラブの春 (2011)

### ▼イラク戦争の負の遺産

フセイン政権に関係した者 (バアス党関係者、軍関係者など) を排除  
 イラク政府、イラク軍、秘密警察などは地下に潜行  
 →社会 (インフラ・金融・国際関係・行政・警察・ライフライン) が機能しなくなる  
 宗派対立 (スンナ派 vs シーア派)、民族対立 (クルド人問題)、イスラーム過激派によるテロ  
 が相次ぐ  
 多数派のシーア派が優遇され、少数派のスンナ派はフセイン時代に恩恵を蒙ったとして  
 冷遇  
 ヨルダン出身のザルカウィが率いる「イラクのアル・カーイダ」が、スンナ派地域で反米武装  
 闘争を繰り広げる →のちの「イスラーム国」  
 ザルカウィは2006年、米軍の空爆で死亡

### ▼シリアとイラクで「開かれた戦線」が成立

アル・カーイダのネットワーク (とくにインターネット経由の情報伝達) が機能しなくなる  
 国際組織としてテロ (ジハード) を実施することが困難に  
 アブー・ムスアブ・アッ・スーリーによる個別ジハードの提唱

論文『グローバル・イスラーム抵抗への呼びかけ』2004年

分散化し、組織を最小化し、組織間のつながりを極力減らしていくことで、摘発を逃れることができる

それぞれ個別の場所で、小規模の、しかし象徴的に人目を惹くテロを実行していく

ローンウルフ (一匹狼) 型テロ、ホームグロウン型テロ

アル・カーイダのフランチャイズ化 (自立分散化)

やがて紛争地域に「開かれた戦線」という聖域を見出して大規模な武装化・領域支配の権力を掌握する

スーリーの計画を先取りするように、イラク戦争でできた「開かれた戦線」に「イラクのアル・カーイダ」が登場し、やがて「イスラーム国 (IS)」となっていく

### ▼頓挫した「アラブの春」

各国でイスラーム主義政党 (穏健派) が伸張するが、失政で民衆の支持が受けられず

エジプトの軍事クーデターとムスリム同胞団弾圧

リビア内戦と東西に別政府樹立、武器と傭兵がアフリカ各地に流出

イエメンの軍事クーデターとサウジ・イランの代理戦争

唯一チュニジアだけが、新しい体制が定着

シリアでは、少数派のアサド政権が民主化を強権的に弾圧

さまざまな反政府勢力 (過激主義／穏健主義) が乱立

内戦が泥沼状態になり、イスラーム国が出現

国民 (約2200万人) の半数が難民となって出国

池内恵による「アラブの春」の当面の帰結

1. 中央政府の揺らぎ
2. 辺境地域における「統治されない空間」の拡大
3. イスラーム主義穏健派の退潮と過激派の台頭
4. 紛争の宗教主義化、地域への波及、代理戦争化

### ▼ようやく落ち着きかけていたイラク情勢の急変

ペトレイアス将軍による「交番作戦」の成功

広く地域に展開し、人道復興活動などで地域住民の心理的信頼を獲得

スンナ派諸部族やイラク覚醒国民評議会との連携を強化 →治安の劇的回復

## 2011年末の米軍完全撤退で一変

米世論もイラクの泥沼状況にうんざりで、厭戦気分高まる

オバマ大統領がようやく公約を実現

米軍という重石が取れて、マリキ政権（シーア派）が失政を積み重ねる

スンナ派民兵への給与支払いの停止

政権内のスンナ派の追放（テロ支援の疑い）

スンナ派居住地域が、一気に反政府勢力に反転

## ▼フセイン政権残党のイスラーム国への流入

国際ジハード組織だった「イラク・イスラーム国」が、土着の政治勢力と手を結ぶ

旧フセイン政権の中核にいた軍人たちを多数登用

ナクシュバンディー教団軍（イスラーム神秘主義教団）……実態は不明

フセイン政権のNo.3が率いる秘密組織

軍事的にしだいに優勢になり、「国」としての仕組みを整え始める

## ▼アル・カーイダから離反したイスラーム国

シリア土着の反政府武装勢力として「ヌスラ戦線」が台頭

シリア人主体のアル・カーイダ系武装組織

イラク・イスラーム国は、ヌスラ戦線との統合を掲げて「イラクとシャームのイスラーム国」と改称

ヌスラ戦線は統合を拒否して、シリアでの戦い継続とアル・カーイダへの忠誠を表明

イスラーム国の残虐ぶりに、アル・カーイダ指導部が反発

バグダディーのカリフ即位宣言を認めず、絶縁

## ▼イラクで広い地域を電撃的に制圧し、カリフ位を宣言

2014年6月、イラク第二の都市モースルを制圧

フセイン元大統領の出身地のティクリートなど、スンナ派地域を次々と制圧

指導者バグダディーがカリフ位を宣言

世界のイスラーム共同体全体の正統的な指導者を名乗る

バグダディーが何者か、どこまでカリフにふさわしいかは、まったく不明

「イラクとシャームのイスラーム国」から「イスラーム国」に改称

## ▼残酷さをアピールするプロパガンダで世界を恐怖に

アサド政権軍側の捕虜や外国人（ジャーナリスト・援助活動家）の残酷な殺害映像を、ネットを通じて世界に公開

オレンジ色の囚人服（米軍刑務所と同じ）を着せて斬首

ムスリムを焼殺（最期の審判で復活する肉体を失うとして、火葬は恐怖）

異端・少数派（ヤジディ教徒）女性を性奴隷に

クルアーンの章句を一方的にゆがめ、こじつけて解釈

## ▼巧妙なメディア戦略で、欧州の若者をリクルート

インターネットや携帯電話、ソーシャルメディアを駆使

ハリウッド的手法を使った高度な映像表現

ジハード・ナシードを効果的に配置

ホスト国で未来への希望を感じられない者たちが欧州から参加

それまで中流の西欧的生活をしていたのに、突然イスラーム国へ旅立つ  
主張のなかに色濃く漂う終末観

## ▼テロの拡散

アフリカ各地やアジアで、現地の支部がテロを実施

正式な支部なのか、イスラーム国を名乗っているだけなのか

フランスでのローンウルフ型テロ

シャルリー・エブド事件

西欧側の挑発……ムハンマド風刺画事件

移民排斥を訴える右派・極右の伸張

シリアで訓練された元戦闘員が指揮するホームグロウン型テロ

パリ同時多発テロ事件

軍事的にシリア、イラクでしだいに追い詰められ、国外でのテロを企画

## ▼各国の思惑が交錯して、当面の解決ははかれそうもない

シリアの今後をめぐって、各国の思惑が複雑に交錯

それぞれの国内・外交事情をかかえて、イスラーム国に対して効果的な方策が打てない

米国、欧州、ロシア、トルコ、イラン、サウジ



## ▼非対称戦争の時代を私たちはどう生きたらいいのか？

テロリストを武力（空爆・無人機・地上軍）で完全に殲滅することはできるのか？

市民の巻き添えは避けられないのか？ やむをえないと済ませるのか？

世界各国が互いに排外主義を貫くことで、テロを封じ込められるのか？

メルケル首相が失脚したら、仏国民戦線が第一党となったら、トランプ氏が大統領に  
当選したら、プーチン大統領がさらに力を持ったら、世界はどうなるのだろうか？

イスラーム過激派のメンバーはみんな「狂信的」なムスリムなのだろうか？

他の文化に属する者を心の底から憎んでいるのだろうか？

対話の可能性はないのか？

私たちにできることは何か？

## ジハーディストのベールをかぶった私

アンナ・エレル著／本田沙世訳  
日経BP社

九・一一から十四年が過ぎ、アルカイダは求心力を失った。アフガニスタンの山奥に隠れ潜んでいくらジハードを唱えても志願者の心には届かない。代わって、ネットを駆使した高度な情報戦略を持つIS（イスラーム国）の脅威が世界を揺るがしている。残酷な斬首映像で恐怖をまき散らし、欧州の若者を巧妙に勧誘し、各国の過激派組織を配下に置く。

昨年の四月、ISに惹きつけられる若者たちを取材していたパリ在住の女性ジャーナリストである著者に、フェイスブックのメッセージが届いた。このアカウントはメロディーという偽名で開設したもので、イスラーム教徒であることを装うために前夜、シリアにいるジハード戦士の自己紹介動画をシェア（共有）していた。メッセージの送り主はこの戦士で、シリアに來ないかと誘っている。テロリ

ストを直接取材できる！ 職業倫理を思いながらもこれは希有のチャンスと思い、改宗した悩み多き二十歳の女性メロディーとして著者は返信する。のちにわかつたのは、相手はビレルという三十八歳になるパリ生まれのアルジェリア系の男で、後日カリフ即位を宣言したバグダディの信頼が厚い、高位のIS幹部だった。

ほどなくビレルは、テレビ電話のスカイプで直接顔を見ながら話したいと言いつ出す。いくら大スクープが目の前にあるとはいえ、ばれたらどんな深刻な事態になるのか。所属する新聞社の了解のもとに、著者はヒジャブ（ベール）をかぶって二十歳の小娘に扮し、ビレルに向き合う。それを同僚のカメラマンが脇からこっそり撮影する。日本のメディアではありえない、えげつないおとり取材だ。

教義をねじ曲げてジハードを説くうちに、ビレルはメロディーに結婚を迫るようになる。家族を捨ててシリアに來れば、王妃のような暮らしができるという。著者はヒジャブをかぶれば瞬時にメロディーの人格にスイッチできるようになり、

どんどん取材に深入りしていくが、やがてビレルは本性を現わして、きわどい下着や高価な香水を持参して自分を喜ばせると性的な要求を持ち出し、著者は分身を演じられる心のゆとりを失っていく。

こんな取材ははたして許されるのか。当時の著者は、ビレルが仕掛けてきた罠に彼自身を陥れてやると思い詰めていたようだ。そして取材の仕上げとして、シリアに來いという執拗な誘いに乗ったふりをして潜入ルートをたどり、出迎えにくる使者を隠し撮りしたあとでヒジャブを脱ぎ捨てるつもりで旅立つのだが……。ここから先はネタバレになるので、書けない。小説をしのぐ急展開の連続で、しびれるような緊迫感と恐怖を味わった。若者たちの心の隙間に巧みに入り込む、ISの闇。その手口と実態を暴いた本書が、防波堤となる。（評・丸山 純）

（月刊『望星』2015年10月号）  
■アンナ・エレル（仮名） 三十歳のフリージャーナリスト。ISに処刑宣告されているため、身元は隠されている。現在仏警察の保護のもとで暮らしている。

## イスラーム化するヨーロッパ

三井美奈著／新潮新書

一月にパリの風刺画新聞社が襲撃され、夏から秋にかけてはシリア難民が各国に押し寄せ、十一月にまたパリで無差別テロが起きた。イスラームによつて欧州が根底から揺さぶられた二〇一五年は、大きな歴史の転換点だったのかもしれない。そんな節目の年を振り返り、その背景をじっくり考えてみるのにふさわしい、コンパクトなハンドブックが刊行された。著者は読売新聞のパリ支局長として赴任し、苦悩する欧州の姿を四年にわたつて見つめてきたジャーナリストだ。

本書の前半で著者は、突然家出をして「イスラーム国」に合流したり、地元でテロを引き起こした移民家庭出身の若者たちを追う。ホスト国の公教育を受けて国籍を持ち、欧州人としてまずまずの中流生活をしてきた彼らがどうして過激主義に惹かれていったのか。肉親や識者らの証言から浮かび上がるのは、どんなに西欧社会に同化しても未来が開けない、

絶望的な閉塞感だ。続く中盤でも、女性抑圧の象徴であるベールの着用は民主主義への挑戦だとみなす左翼の論理や、格差是正に向けた諸政策が逆に格差や差別を拡大してしまった矛盾など、移民社会の前に立ちちはだかる排外主義の壁が描かれる。終盤の新聞社襲撃を読み解く章では、事件の背後関係がやつと把握できた。

十一月のテロを踏まえてイスラームと欧州政治を語る終章が、本書のハイライトだ。ドイツではネオナチや極右勢力に加えて移民排斥を唱える市民団体ベギータによるデモが数万人規模に膨れ、フランスでは極右政党の国民戦線が得票を伸ばし、寛容を誇つてきた北欧各国やオランダでも反イスラームを掲げる諸政党が大きな発言力を得た。そんな「憎しみの時代」に、イスラーム系政治家がもつと輩出してくることに著者は希望を見る。欧州の教訓が、少子化の日本が歩む異文化共生への道を指し示す。（評・丸山 純）

（月刊『望星』2016年2月号）

## 独で女性襲撃多発、難民への反感強まる　メルケル氏窮地

ベルリン＝玉川透

2016年1月11日02時59分／朝日新聞デジタル

写真キャプション:ドイツ・ケルンで9日、大みそかの深夜から元日の未明に相次いで起きた性犯罪の抗議のため集まった反移民団体「ベギーダ」の支持者の前に立つ警官隊＝ロイター

難民受け入れに積極的なドイツのメルケル首相が新年早々、窮地に立たされている。西部ケルンで昨年の大みそかに女性への強盗や暴行が多発し、容疑者の中にアフリカや中東からの難民申請者が多く含まれていたことが判明。難民に対する国民感情は悪化し、受け入れ反対派が勢いを増す。

「ケルンで大みそかに起きた事件は、忌まわしい犯罪であり、断固とした対応が求められる」

メルケル氏は9日、独西部マインツで会見し、強い口調でこう語った。

事件は昨年12月31日の深夜から元日の未明にかけて、ゴシック建築が美しいケルン大聖堂が見下ろす中央駅周辺で起きた。年越しを祝う群衆にまぎれ、男らが集団で通行人の女性を取り囲み、痴漢行為や暴行に及んだり、財布やハンドバッグなどを奪ったりしたという。

地元警察は9日、女性からの被害届が379件に達しており、窃盗や傷害のほかに、女性への痴漢行為や暴行に関する届け出も約4割に上ると明らかにした。

内務省は8日、確認できた容疑者は32人で、うち22人が難民申請者だったと発表。容疑者には、少人数のドイツ人や米国人も含まれているが、大半はアルジェリアやモロッコ、イラン、シリアなど中東や北アフリカの出身者で、捜査対象の76件中12件が性的犯罪の容疑という。独有力誌シュピーゲルによると、難民保護施設などから盗品の携帯電話も見つかったという。

また、大みそかの夜にはケルンだけでなく、北部ハンブルクや南部シュトゥットガルトでも同様の事件が起きていた。一連の事件は突発的ではなく、年越しの集まりを狙った計画的な犯行との見方も出ているが、全容は解明されていない。

難民支援に積極的に取り組むドイツの人々に、事件は大きな衝撃を与えた。

事件への対応が不適切だったとして8日、ケルンの警察トップが更迭された。難民・移民に批判的な新興右派「ドイツのための選択派」(AfD)は「難民流入時の管理不備が原因だ」と政権を批判した。

9日には、「反イスラム」デモを続けている団体「西洋のイスラム化に反対する愛国的欧州人」(通称ベギーダ)らの呼びかけで、約1700人がケルン中心部でデモを行い、「性犯罪を起こす難民を追い出せ」などと訴えた。デモ隊の一部が暴徒化し、警官隊と衝突する騒ぎも起きた。

これに対し、難民排斥に反対するデモも行われ、1千人以上が「ナチスは出て行け」などと訴えた。

ケルンの事件を受け、メルケル氏の与党キリスト教民主同盟は9日、警察の取り締まり強化に加え、有罪判決を受けた難民申請者への対応などを協議。3年以上の実刑を受けた場合などに難民申請者を国外退去させる規定になっている現在の制度について、厳格化するよう政府に法改正を求めることで一致した。

メルケル氏も9日の会見で、罪を犯した難民申請者について「執行猶予付きか実刑かに関わらず、ドイ

ツに居住する権利を失う」と明言。厳格化が「独国民だけでなく、ドイツで暮らす大半の難民にも利益になる」と理解を求めた。

### ■受け入れ歓迎ムード下火

「我々は成し遂げられる」を合言葉に、メルケル氏は難民受け入れでの結束を国民に呼びかけてきた。

戦後ドイツの歴代政権は、難民や移民を積極的に受け入れてきた。多様性を重んじる独社会の人権意識に加え、ナチスによるユダヤ人らの大量虐殺(ホロコースト)や、その後、多くの難民を生み出した過去への反省が背景にある。

ドイツでは経済成長に伴い、現在50万人の労働力が不足しているとされ、特に看護や介護、建設分野で人材が求められている。一方で日本と同様に少子高齢化が進んでおり、経済界を中心に難民を新たな労働力として期待する側面もある。

独メディアによると、ナーレス労働相は昨年12月の議会で、「2016年中に数万人の難民がドイツの労働市場に参入できる」との見通しを示した。独電機大手シーメンス社の幹部も独紙で「社会統合が成功すれば、将来、労働力として貢献するだろう」と語る。

戦後、トルコなどから多数の移民を受け入れた経験から、社会統合のシステムも確立している。認定審査を経てドイツに居住が認められた難民たちは、政府の「統合コース」に従い独語はもちろん、歴史や文化など独社会に溶け込むためのスキルをたたき込まれる。

だが、ドイツ市民の難民歓迎ムードはここにきて急速に下火になりつつある。

中東シリアなどからドイツに入った難民は昨年1年間で、当初の予想80万人を超える過去最多110万人に達した。地方政府ごとに受け入れを割り当てているが、保護施設が不足し、対応する職員も足りない。異なる文化や宗教の難民同士がいさかいを起こし、警察が出動する事態もたびたび起きている。

難民流入の玄関口となっている独バイエルン州のゼーホーファー首相は、受け入れ数は「年間20万人が社会の限界だ」と言い切る。

難民が社会に溶け込む道のりも険しい。居住を認められた難民の多くが、言葉の壁などに阻まれて実際には職に就けず、生活保護などを受給している。

パリで昨年11月に起きた同時多発テロでは、実行犯が難民に紛れて欧州に渡っていた可能性が高まっている。ドイツでもテロへの脅威が高まるなか、極右勢力による保護施設への襲撃や放火は昨年1千件を超え、前年の2倍以上に。反難民デモも収まる気配はない。

難民受け入れを進めるメルケル政権だが、難民支援策めぐり、ドイツの世論は二つに割れつつある。

独公共放送が事件後に行った世論調査では、41%が難民流入はドイツに「不利益」と回答。「有益」の38%を上回った。また、68%が国内でテロが起きることが「不安」と答えた。

冬場に入って鈍化している難民の流入も春になれば、再び勢いを増す。難民に対する国民感情が悪化すれば、メルケル政権への反発が広がりかねない。政権は、「憎むべきは難民ではなく犯罪だ」(政府報道官)と国民に理解を求めている。(ベルリン＝玉川透)